

兵に常勢なく水に常形なし —武田信玄 治水の兵法—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

室町時代から安土桃山時代に至る約100年間は群雄割拠の戦国時代として争いが絶えなかった。作家の司馬遼太郎が戦乱の世を『国盗り物語』と表現したように領土を守り、さらに広げることが戦国武将の死活的な使命となっていた。

とりわけ武田信玄（1521—1573）は戦国最強と恐れられ、宿敵である上杉謙信との川中島の戦いで勇名を馳せている。晩年の三方ヶ原の戦いでは徳川家康と織田信長の連合軍を撃破した。

幼少の頃から学問や武芸に秀でていた信玄は古代中国の兵法書『孫子』に心酔し、実際の合戦に適用した。それだけでなく洪水から領民を守ろうと治水事業にも流用する。信玄にとって孫子の兵法と水の流れは密接な関係を持っていた。

陰謀を企てた父を追放

信玄は甲斐の国（山梨県）甲府市の守護大名である武田信虎と豪族・大井家の娘である大井の方の嫡男として生まれた。幼名は太郎、16歳で元服して晴信、39歳で出家して信玄と名乗る。

元服後、妻に京都の公家の三条の方を迎えた。信虎の娘婿で駿河の国（静岡県）を統治する今川義元が両家を仲介したといわれている。

甲斐の国を統一した信虎は勇猛果敢な合戦の名手として近隣諸国に知られていた。しかし親族や家臣の意見を聴き入れず孤立を深めていく。

とくに聡明で理知的で学問好きの信玄を嫌い、

弟の信繁を寵愛した。嫌悪は憎悪に転化し、跡継ぎは信繁と決めて信玄の追放を企てる。ところが陰謀を察知した信玄は父に不信感を抱く重臣たちを味方につけて逆に父を駿河の国へ追放した。



武田信玄像
長谷川等伯画

若き信玄が一滴の血も流さずに父を追放することができたのは家臣に信頼されていたからだ。従来の戦国大名は側近から意見を聴く程度で意志決定はひとりで行うのが慣例となっていた。だが信玄は既成の観念に囚われず合議制を導入する。

合議制とは会議を通じて意志決定を行うことだ。信玄は定期的に合議を開いて家臣たちの意見を聴き、なかでも少数意見に熱心に耳を傾けた。信虎の駿河追放も合議で決定したという。

父との確執で上に立つ者の心構えを身につけた信玄は「大将たる者は家臣に慈悲の心をもって接することがもっとも重要である」「信頼してこそ人は尽くしてくれるものだ」と説くようになった。信玄の逸話や軍略を中心に編纂された甲州流軍学の聖典『甲陽軍鑑』には「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」という信玄が詠んだ著名な歌が収められている。

城や武器ではなく信玄は何よりも人間を重視した。身分に関係なく実力のある者は要職に抜擢

した。たとえば重臣の高坂弾正は農家の出、軍師の山本勘助は一介の浪人だった。合戦の際は必ず家臣と軍議を行い、戦場で傷ついた将兵のために信玄の隠し湯と呼ばれた湯治場を用意した。

20年に及ぶ歴史的改修工事

山に囲まれた甲府盆地は大雨が降ると河川が氾濫し、毎年のように洪水を引き起こしていた。溢れ出た水で領民や家屋が流され、田畑に石や砂が押し寄せて農作物が収穫できず、飢え死にする人々も少なくなかった。

21歳の若さで甲斐の国の領主となった信玄は領土と領民を守るために抜本的な治水事業を決意する。まず甲府盆地を流れる釜無川と御勅使川の観察を始めた。大雨が降ると岸壁から川の様子を眺め、水の流れと地形の関係、土砂の動き、川の性質などを把握した。

これまでの記録で洪水は釜無川と御勅使川の合流地点で頻発していることから御勅使川の北側に新しい水路を設け、釜無川との合流地点を竜王高岩のある場所に移動する計画を立案する。竜王高岩は高さ14～15mの頑丈な岩壁だ。合流時の激流を竜王高岩に衝突させて勢いを緩和する。

同時に水が市街地に流れ込まないように長い堤防を築くことにした。のちに敬意を込めて信玄堤と名づけられ、現在も水防の象徴として地域の人々に守られている。信玄堤は石堤と土堤で構成され、石堤は非連続の霞堤の発祥の地として有名だ。大雨のときは霞堤の隙間から水が溢れ出し、雨がやむとふたたび隙間を通してそれぞれの河川に戻っていく。土堤には防水林としてひめ笹、松、欒、柳などを植えた。釜無川の東にある笛吹川の土手沿いは万力林と呼ばれ、約15万㎡に及ぶ松林が整備されている。こうした一連の河川改修工事は1542年に開始され、20年近くの歳月をかけて完了した。歴史的な工事に伴って原野や山林を開発し、新たに田畑や住居を造成する新田開発も飛躍的に進んだ。

洪水期まえの4月15日に行われる御幸祭、通称おみゆきさんは水防の祭りとして信玄が強く奨励した。領民たちは神輿を担いで信玄堤の参道をねり歩き、水害のない平穏な日々を祈願した。信玄

は河川の周辺に住む人々への課税を免除し、その代償として信玄堤の定期点検を命じている。定期点検は信玄堤の踏み固めとして浸透した。

われ好敵手を失えり

治水事業に際しても信玄は孫子の兵法を指針として行動した。孫子は紀元前中国の春秋時代の武将・孫武の尊称であり、信玄が軍旗に書き記した「疾如風、徐如林、侵掠如火、不動如山」の14文字は兵法書『孫子』の軍争篇から引用されている。「疾きこと風の如く 徐かなること林の如く 侵掠すること火の如く 動かざること山の如く」という風林火山の旗印は傑出した武田騎馬軍団の代名詞として全国に鳴り響いた。

風林火山にとどまらず『孫子』の虚実篇では兵＝軍を水にたとえている。「兵の形は水に象る。水の形は高きを避けて下きに趨く。兵の形は実を避けて虚を撃つ。水は地に因りて流れを制し、兵は敵に因りて勝ちを制す。ゆえに兵に常勢なく、水に常形なし」と。

簡潔にいうと軍の態勢は水のようなものだ。水の流れは高い所を避けて低い所へ流れる。軍もまた備えの強い所を避けて備えの弱い所を攻める。水は地形に応じて流れを変え、軍もまた敵の態勢に応じて勝利を取める。したがって軍に決まった姿はなく、水に決まった形もない。

水のように臨機応変に軍を動かすことが孫子の兵法の真髓であることを悟った信玄は1572年、織田信長と対立している室町幕府将軍・足利義昭に要請され、3万の兵を率いて上洛を開始する。しかし病状が悪化して進軍の停止を余儀なくされ、甲斐の国に戻る途上でこの世を去る。遺言としてみずからの死を3年間秘匿し、和睦が成立した越後(新潟県)の上杉謙信に頼るように嫡男の勝頼に言い残した。ところが信玄の死はまたたくまに全国に広がった。およそ12年間にわたって川中島における5回の死闘を演じた上杉謙信は食事の席で信玄の訃報を知らされた。歴史家の頼山陽が江戸時代後期に上梓して反響を呼んだ武家盛衰史『日本外史』によると謙信は「われ好敵手を失えり。世にまたこれほどの英雄あらんや」と絶句し、箸を落として号泣した。